

(ごびとの囁き 最終話 置換)



小太郎君には、大人になつたらなりたいものがありました。

それは、考古学者でした。

大空の下での野山歩きが好きで、土を掘りくり返すのも好き。調べ物が好きで、推理を重ねて真相にたどり着く判じ物としての刑事ドラマも好き。

他にも、旅行家だとか南米の移民だとかシルクロードの探検家も、なりたものの候補に挙がっていたのですが、それらはあまりにも大まかすぎてとらえどころがないような気がして、間違いなく土を掘った経験から想像することが出来る考古学者に的を絞ったのです。

もう一つの理由は、他の夢がただただ歩き回ったり、動き回ったりするのに対して、考古学者は観察したり、想像したり、こうではないかと仮の答えを出したりする、えも言われぬ楽しいオマケがくっついていたからです。

前の学校での自由帳は、知らず知らずのうちに、その夢を更に具体的なものにするのにとっても役立つ었습니다。それで小太郎君は自由帳の宿題が大好きだったのかもしれない。

ところが図らずも越境入学する羽目になって以来、その夢がいつの間にか見えなくなっていました。いや、そんな夢を持っていたことすら忘れてしまっていたのです。それほど、新しい学校での生活は、それまでの生活から激変していったのです。

夢に代わって現れたのが、どっちつかずだの、卑怯者だの、うそつきだのの「ありがたくない名前たち」でした。

気分転換に野山歩きをしたくても、新しい学校は街の真ん中であって、野山がなく、ならば家の近くで、と思うと、家の周りの野山で「捨ててきた友達」とあって「裏切り者」と言われるのが恐くて、それも出来ませんでした。

なんだか、小太郎君は自分がテレビの中で見た、とうまる駕籠で市中を引き回される罪人が表通りを、手を振って歩けない日陰者にでもなったような気がしました。

「なんでこんなことになったんだ。なんでこんなイヤな思いをしなくちゃならないんだ」

小太郎君はだんだん腹が立ってきました。その時、お父さんの顔が浮かびました。

「お父さんが悪いんだ。転校なんかさせて」

しかし、その直ぐ後には

「逃げたらズドンだぞ。いいか、卑怯者になるな」

と言う言葉が、その怒りを骨抜きにするかのようによみがえってきました。

小太郎君は、苦しくなりました。

考古学者にはなりたいたけれど、卑怯者にはなりたくない。でも、卑怯者にならないために、考古学者を諦めるのもイヤだ。

小太郎君の頭の中では、お互い相反する考えがぐるぐる回って、どうしたら良いのか分からなくなってきました。

そんなとき、突然あのこびとの囁きが聞こえてきました。

「いずれはみんな死ぬんだ。おまえもだ」

小太郎君は、ぞっとして脂汗が流れてくるのを感じました。

いずれ死ぬのに、したいこともしないで、大通りから外れて、こんなへんな脇道に逸れていて良いのか？

「イヤだ。こんな思いのまま死ぬのはイヤだ！」

言葉にすれば、そんな文言でしたが、実際には小太郎君はそんなキチンとした言葉を思いついたのではなく、ただ闇雲に、何かに対して突っかかっていきたい気持ちと同時に、それをしないでいる自分自身に対してとてつもなく腹が立っていたのです。

その夜、転校して既に2ヶ月が経ち、六年生への進級が間近になっているというのに、いっこうに勉強がはかどっていない小太郎君に業を煮やしたお父さんが、小太郎君を自室に呼んでこう言いました。

「四月から六年生になる。その一年後には中学生だ。公立ながらこの辺の秀才が集まる学校で、勉強も大変になる。このまま行ったら、おまえはその中で、間違いなく沈没してしまう。

そうならないために、来週から塾に行け。隣の進学塾だ。分かったな」

いつものことなら、頭が良くて身体も大きいお父さんが言うことに間違いがあるなどと疑ったことがない小太郎君でしたが、昼間のこびとの囁きのせい、この日の小太郎君は少し違っていました。

「イヤだ！行きたくない！」

小太郎君は思いきって言いました。

言ったあと、興奮と恐怖で、握りしめた拳がガタガタ震えました。

「なんと言った？今、お父さんになんと言ったんだ！！」

小太郎君は、心臓がのどの奥から飛び出しそうになりました。しかし、それでもまるで何かに憑かれたかのように、そう、こびとの囁きを振るい払うかのようにして

「イヤだ！イヤだ！絶対に行かない！学校が終わった後で、またその上に別のところで黑板と教科書を黙って座って見ているなんて、もうイヤだ、そんなの！」

と、泣き叫びました。

いつも冷静で、微動だにしないお父さんが、珍しくその勢いに押されて、少したじろぎました。

脇でお母さんが

「小太郎、お父さんになんていうことを言うの！謝りなさい！」

と、ややきつく言いました。お母さんはいつも大抵お父さんの味方をしていたからです。

お父さんは、しばらく黙っていましたが、少し、息を抜くと

「小太郎、お父さんはおまえの将来のためを思っている。おまえにはまだ分らないが、世の中というのは大変なところだ。そこを生き抜いていくためには武器がいる。良い学校に行くのは、その優秀な武器を手に入れるためだ。それを理解しろ」

そう言われると、それこそ小太郎君にはそれに反論するだけの「優秀な武器」に見合う理屈の持ち合わせがありませんでした。

小太郎君は、その武器を持ち合わせてはいなくやしきで自分の胸をかきむしりたいような思いでいっぱいでしたが、もうそれ以上は何も言えなくなってしまうました。

ところがお父さんは、何を思ったのか突然

「おまえは将来一体何になりたいんだ？なりたいものがあるのか？」

と訊きました。

小太郎君は、一瞬ためらいましたが、どうせここまで言ったんだから、後は野となれ山となれ、馬鹿にされたっていいさ、と思いつつ

「考古学者になりたいです」

とぼつりと静かに言いました。

当然突っ込まれると思っていたのですが、案に違いお父さんは、小太郎君を馬鹿にするようなことは言いませんでした。そうしてしばらく黙って考えるそぶりを見せてから

「進学塾は行かなくていい。その代わり英会話塾に行け。英語を勉強しろ。それなら良いか？」と全く思いがけないことを言いました。

「英会話？」

小太郎君にはお父さんが考えていることが全く分かりませんでした。しかし、小太郎君は、今まで考えもしなかった「英会話」というものに、何故か少しだけ興味をひかれたのです。

小太郎君は当然「歩み寄り」などと言う言葉をまだ知りませんでしたが、お父さんが譲ったぶん、自分も少し譲らないと行けないかなと思いつ

「はい」

と素直にこたえました。

脇でお母さんが少しホッとした様子を見せました。そのお母さんにお父さんは

「腹が減ってきたやれ。小太郎もだろう。飯の用意をしてくれ。あと、明日、本屋に行って英語の辞書を買ってきてやれ。辞書名と出版社名は後で俺がおまえに書いて渡すから」

と言いました。そうして

「小太郎、これからは世界が相手だ。貿易にしろ、学問にしろだ。英語はそのためには非必要な武器だ。考古学者が英語を喋れんでどうする。発掘先が日本だけとは限らんだろう？むしろ世界の大陸が舞台だ」

と言いました。

小太郎君は、今度は力強く

「はい！」

と大きな声で返事をしました。

小太郎君は、昼間とは打って変わってところが少しわくわくするのを感じました。そうして、自分のおもっていることは、恐くてもちゃんと言った方が良いのだなとも思いました。そのあと、小太郎君はテレビで時代物を見ました。薩摩藩士、中村半次郎を主人公にしたものでした。

その中で、主人公が、引用なのか自分の言葉なのかはわかりませんが、

「我が胸の燃ゆる思いに比ぶれば、煙は薄し桜島山」と言ったのが、語呂が良いせいもあってか、妙に耳に残りました。

英会話、世界の大陸、燃ゆる思い。

いつも間にか、どっちつかず、卑怯者、うそつきと言う言葉が、小太郎君の頭の中で、その三つの言葉に置き換わっていました。

小太郎君は、早く明日になって、お母さんが英語の辞書を買って来てくれないかなと思いました。